

「ハリガネズン」——子育てを失くす禍

ズソ科

危険度：★★★★★

生息数：——

生態

ズソ科は本書執筆中に初めて確認された新しい禍群である。我々が初めて確認したこの「ハリガネズン」も発見されたばかりで詳しい生態については未だ不明である。ズソ科の禍は他のどの禍とも違い、まず進化の痕跡が見られない。まるで最初からこの形で創造されたかのような印象を受ける。またズソ科の禍が人間から撰取するものはよく分かっている。ただし憑かれた人間は思考に特定の傾向を持つようになることが分かっており、禍の持つ特徴とは一致している。最後にズソ科の禍は全ての人間に憑いている。我々がこの科を発見するのが遅れたのもこれが原因で、健常者がいないために「これら」が禍であるということに気づけなかったのである。

ズソ科の禍はこのように非常に特異な容姿と生態を持つ。形容しがたいものであるが、私はそれらに強い「悪意」のようなものを感じる。他の禍とは根本の性質に違いがあるのではないかと説が有力視されているが、推論の域を出ない。ハリガネズンは人間の指に憑き、その形状を活かして爪の裏側に根のように身体を侵入させる。この行為の意味はまだまだよく分かっていないが、この禍に憑かれると子供を集団管理することを是とする思考傾向を持つようになることが分かっている。

解説

子供を他人に預け、集団で管理することとは人間全体の作業効率を上げることにつながる。ただしそれは「子育て」を子供の身体を成長させる行為・また社会的作法を身につけさせる行為として見た場合であり、幼少期に憑く禍の数々に対する予防は含まれていない。その観点で言えば子供の集団管理は危険性の高い方法であり、カカシカモドキを憑けた健常な人間であればその危険性を感じることができるのである。

ハリガネズンに憑かれた人間は保育所を増やす。これにより危険性を感じない人間はどんどん子供を保育所へ預けるようになり、仕事や自分のことに対して精を出す。危険性を感じる健常な人間は子供を預けないまま社会で戦うと負けるであろうことを予想し、子供を作らなくなる。

このように「禍の増殖」と「少子化」の両方を引き起こしているのがハリガネズンである。また更に危険なことに、カカシカモドキを憑けた健常な人間が子孫を残せなくなり、結果として危険な禍を見ることのできない弱い個体が遺伝的に増えていくという現象も引き起こしている。

対処法

対処法は現在不明である。そもそもズソ科の禍がどのように人間に憑くかが全く分かっておらず、また人間にどのようなプロセスで接触し、影響を与えているかも分かっていない。恐ろしい禍である。唯一今現在でも可能な対処といえば、夜中に保育所を爆破して回ることぐらいであろうか。

